本妙日臨律師伝の研究

桑名貫正

はじめに

本妙日臨律師（一七九三―一八二三）は寛政五年江戸青山に生る。その時代に於ける宗門状況は、各檀林教育において台学偏重教学の方向にあり、宗門全体にあっては本化の法門が衰微の状態であった。日導尊者、深草の元政上人の影響を受けた本妙臨師は、本願を立てて本化の法門の顕正とその護法とに一生を捧げ身命を惜まず日蓮聖人の奥旨に肉迫した人である。それは次の文を見ても明らかである。(1)

㈠　本願にまかせて経蔵拝見致し候、又恐れ多くは候得共、台当二家の教観はあら〳〵邪正をわかち候。

㈡　艸山は宗門の内法事観の妙処をつがんために、世縁をさけてひまを得んが為に、自行を専ら面にして化他は随力演説の分と云はれ候跡を学び候間、表には其相をあらわし候へども、底意は護法の心盛んにて候、恐れながら一切経も二家の学問もこれが専一に候

然し臨師は三十一歳という実に短い生涯であったが、宗門近世史に於けるその評価については日輝和上、望月歓厚、執行海秀、茂田井教亨先生等が既に論じている所である。(2)又、時代を越えて現代に於いても日本山妙法寺山主の藤井日達師の行動や、恩師室住一妙先生の純粋宗学の提唱にも大きな影響を与えた人である。(3)今日なお後代に至るま

で、本妙臨師を研究する意義は十分認められるし、又必要である。臨師研究資料は未だ身延町波木井周辺や、雨畑等にも散在しているが、臨師を思慕し顕彰された島智良師の『醒悟園叢書』二巻と音馬実蔵氏編『本妙日臨律師全集』一巻が基本である。それに稲田海素先生の多年宗宝調査の砌、臨師真蹟と対照校合された写本がある。(4)

臨師伝記の研究については、前の全集の中に守屋貫教師『本妙律師小伝』と音馬実蔵氏『本妙律師小伝補遺』が所収されている。最近この二つの伝記を踏まえて立正大学の小野文珖先生が『本妙日臨律師の研究』と題して臨師の前半の生涯を発表されている。(5) これまで以上の三点が纒まった臨師伝記研究の成果である。この小論は、臨師伝記上に於いて新たに二、三の問題を抱き、その考察を試みるものである。合せて前の三点の伝記を併読されることを希望する。

一、出家の時期と飯高入檀の年令考

本妙臨師の出家の時期については従来一様に十九歳出家、そして飯高檀林に勤学した時期も同じく、その年とされて来ている。この問題を解明する前にその根拠となった資料を挙げていこう。まず先きに本妙臨師自ら述べている伝記を紹介しょう。

抑私事は幼少の時よりふかく法華経ニ志し、夙に日啓師の弟子と相成、又がくもんの望ミ有之候て、江戸下谷宗延寺日実師の附弟と相成、飯高だん林へかよひ申候、然るに私ていはつの本志ハ、うけがたき人身をうけ、あいがたき妙法に値奉り候事故、何とぞして生がい信心けんごにして、後生の悪道をまぬかれ申度斗りニ候。（臨師全集二〇八頁）

右の文から、臨師には二人の師匠が存在する。臨師との関係を見ると、日啓師が下総八幡山玉蓮寺の住持の時に出家している。又、日啓師は玉蓮寺の前に摂州西能勢の妙円寺二十世であった。では日啓師がいつ玉蓮寺の住持となったのかという問題には音馬実蔵氏の調査では、日啓師が関東に移ったのは文化四年から八年の間と解明されているので、その期間中ということになる。文化四年は臨師十五歳の時で、文化八年ならば十九歳の年である。この日啓師は臨師二十六歳の時、文政元年九月七日に遷化している（全集二一八頁）。

江戸下谷宗延寺の住持日実師との関係は、臨師自身も述べているが如く日啓師の後で、飯高檀林に顔が効くので入檀上、附弟となった経緯である。臨師三十一歳遷化の時は老齢乍ら水戸三昧堂檀林の学侶等を従えて法会の導師を勤めている（全集二三二頁）。日実師に最誠という弟子がいて、臨師の兄弟子に当る。最誠師は後に臨師に師事し弟子分となり、七、八年間行動を共にしている。[7] その最誠師は臨師遷化の法会の折、願文を表白し、醒悟園に於て法会の導師を勤め再び願文を表白している。その願文の中に、臨師の伝記が見られる。

恭収二取舎利一修二一会法筵一。熟尋二和上一化梗概一。幼稚好レ学。性敏才芸秀レ倫。在二塵俗中一略徧二覧内外典一。年甫十九。出二塵網一脱二俗服一。爾来慕二艸山大和尚之徳一。（全集二三二頁）

此に於いて、本妙臨師の出家の年齢が十九歳と明確に出て来るのである。臨師との関係から考えて、最誠師の史料は第一級のものと見て差し支えない。従って十九歳出家説は恐らく間違いあるまい。これが従来の十九歳出家説の根拠なのである。そして同じ歳に飯高檀林に学ぶと短絡的に結びついて考えられて来たものと思われるのである。飯高檀林には、開講回数が春秋の二回と定まっており、その開講期間も次の如く決まっていた。[8]

㈠　古檀林では、承応三（一六五四）年頃　春―二月朔日始、五月十日終了（之云二一夏一）

秋―八月朔日始、十一月十日終了（之云三一夏一）

㈡ 享和四年（一八〇四）正月（臨師十二歳の時）では、

春―二月二日始、四月二十四日終了

秋―八月二日始、十一月二十四日終了

さて臨師は果して、この春秋のどちらから入檀したのだろうか。という素懐な問題を抱き続けた時、文化丙子（十三年）二月三日付けの確かなる年号入り（全書二〇七頁）の書簡を見て心が踊る思いを感じたのである。これは、臨師より日啓師宛の草稿である。

干茲于小子、伏算三星霜一、已二十四歳、出家去往、蓋一千五百日云云（全集二〇五頁）

この短い内容の中に、臨師の出家時期を解明する鍵があったのである。文化十三年二月三日現在が臨師の二十四歳であり、その二月三日を以って一千五百日を逆算すれば答えが出よう。その逆算の結果、四年と一ヵ月十日前となり、文化八（一八一一）年十二月中旬から下旬にかけて出家したことが明確となって来るのである。これによって臨師の出家は十九歳の十二月と確定したので、従って前に挙げた開講期間から考えて、飯高檀林にその年に学ぶことは不可能なことが理解できるのである。ここで、入檀の年令は早くても臨師二十歳の春、二月からということが確定するのである。

次に臨師が学んだ飯高檀林に於ける学級と教科書とその期間を述べれば次の通りである。(9)

㈠ 古制規、承応三年（一六五四）頃

一、名目部は西谷名目を毎日で二夏（一年）。

二、四教儀部は諦観録を隔日で二夏（一年）。
三、集解部は従義集解・蒙潤集註を三日目毎に三夏（一年半）。四、観心部は金錍・顕性録・十不二門・文心解を四日目毎に三夏（一年半）。以上を下四部（しもしぶ）といい五年を要する。五、玄義部は玄義・釈籤・末註を七日目毎に六夏（三年）。六、文句部は文句・記・末註を七日目毎に六夏（三年）。七、止観部は止観・輔行・末註を独学研究。以上を大部という。八、御書科は御書其他を解読研究。全科修了に早くて十三―五年要すのが通例という。

㈠　元禄十三年十二月二十八日首座五人の談合によって決められたものは、㈠の古制規より席数が多いので年数も若干多く要す様である。因に文化三年（臨師十四歳当時）の学僧は七四九人いたことがわかる。[9]

臨師の檀林中に於ける学業費等の資助は日啓師の前住であった能勢妙円寺の信者達からも出ていた。文化十一年六月廿三日付けの書簡に資助者達の中上栄蔵・谷口仁兵衛・同佐兵衛等の名前が見える。又同時に臨師は二十二歳で飯高を退檀していることもわかる。[10]

拙子事因資助飯高檀林玄義迄昇進致し候、然ニ少々存より有之、勤学一向ニ仕度候ニ就、世事を去り候て身延山中引籠申候、

右の文から、臨師の退檀は玄義部の時である。そうすると四下部は普通五年要するのに僅か二年間で越級してしまっていることになる。当時、越級のことは飯高檀林には「次第昇階」の規定があって飛級は出来ない状態であった。[11]このことはまさに破格の待遇と言ってよい。従って、臨師の出家以前に於ける学解の深さが余程の力であったことを如実に示す証左ともなるのである。次に臨師の出家以前のこの点について少しく考察してみたい。

二、出家以前に於ける法華信仰の環境

臨師が自ら言う「幼少の時よりふかく法華経に志」させた、その信仰を育む地盤と宗解の深さを生むに至らしめた環境等のその周辺を検討することにしょう。その影響について考えられるのは、臨師を巡る人々である。臨師周辺の人々の数については音馬編の『本妙日臨律師全書』の中だけでも、その個有名詞は一二五名を越えている。それを今、可能な限り地域別に分析して見ると江戸の人々の三十六人、身延グループの十五人、深草・西能勢関係の人々の五十二人、他は地域の判明がつかず、また各地に点在する人々達である。その全体の中で門下生となった人々の数を二十四人見ることが出来る。深草・能勢関係の人々との縁は臨師十九歳からであり、身延関係者との縁は二十二歳からであるから、従って、周辺と言っても幼少時の臨師に影響を与えた人々は江戸を中心とした範囲に限定される。そこで江戸の三十六人の人々が対象者であるが、臨師の二人の師匠は前に論じた如く出家以後の関係であったから、今はその対象から外される。この三十四人について次の方法を以って考察することにする。

(一) 両親と周辺の人々のつながり

両親（生家）と人々の接触の関係を見れば臨師幼少の頃の影響を考える一方法となる。三十四人の中では行全、前説、高山半七、川越屋正兵衛、箔屋平二郎、朝田薩庵、日童の七人が会っているが、その時期の検討が課題となってくる。

①行全は浅草福井町の出身で大塚本伝寺随応院日芳の弟子、安政六年寂。[12] 臨師飯高退檀の時、行動を共にし門下生となり文政三年頃まで師事す。前説、薩庵、川越屋、箔屋とも面識あり。両親とは一度会っている。文政四年（推

定）正月十四日行全への書簡に「野子両親の状、御き聞せ下されべく候」（全集一八九頁）と両親への信仰教化を依頼されている。臨師との縁は飯高檀林から始まった様である。

②前説は房州の出身で両親とは一度会っている。行全と同様に臨師と行動を共にし弟子分となる。前説兄と三度呼ぶのは曽ては兄弟子か。それは臨師が高山半七宛書簡に文化十三年七月十七日「且前説兄、今般師範父母等化導の為……下関被致候…前説兄は尤生死の大道を修し得たり、我に代て化導を受候て、我為の大幸にも候、此趣くわしく我父母に御伝へ被下候御たのみ申上候」（全集一八四頁）。父母化導について、臨師は機会ある如くに両親の信仰深心を願っていることがよくわかる。文中に、師範化導とあるのは日啓師のことであり、[18] 前説は日啓師の弟子である。前説は高山半七と川越屋・箔屋・左官弥兵衛（全集一五一頁）と薩庵（同一五二頁）と面識がある。臨師と前説の関係は出家以後ということになるが、高山半七が臨師と日啓師との縁結びの可能性があることを注目したい。

③高山半七は四度会っている。半七に関しては臨師自身の語る中からは詳しく知ることが出来ない。半七宛の書簡は先きに引用したものも含めて三通であり、然も短文である。文化十三年か十四年と推定される。両親とのつながりを見ていくと、「拙子老母へ信心御すゝめ可被下候」（全集一八三頁）とあるから半七自身も法華信仰者だということがわかる。この前文に「とかく仏道はさいなんありと思い候しが、よく〳〵信心し候へば、よき事もたくさんにこれあり候、祝々」とあり、経文には信仰して行くと災難にも会うと説かれてはいるけれども、半七には信心の功徳にて何か良きことがあった様である。右の文を見て平仮名の多いことより教養者ではない様である。前説の所で父母化導の伝言役と、次の三通目「尚母マイリ候はゝ、無事のむね御伝言可被下候」（同一八四頁）を見て、半七と両親の家は非常に近い所にあって、お互いに度々、往来の関係があることがわかる。この関係は全集中に於ても他の人々に

は見られない点である。

守屋貫教師『本妙律師小伝』には信州の人（全集二五五頁）とあり、音馬氏『本妙律師小伝補遺』には子孫なお信州にあり（同三〇七頁）とされている。全集中に於て半七を巡ぐる人々を見て、姓のつく者は少くない、その高山という名は恐らく信州出身の意味で姓ではあるまいと思う。朝田薩庵書簡には、ただ半七（同一七八頁）と見えるのみである。半七は川越屋、箔屋、薩庵、前説と面識あり。

④川越屋正兵衛、箔屋平二郎は親と一度会っている。この二人は近い所に住んでいるので（同一四八）手紙を出す時も、臨師より貰らう時も連名の時が多い（同一五一、一七八頁）。その一度とは、臨師の母が文政元年五月十八日、臨師へ出された手紙の中に二人のことが触れられている（同一七八頁）。この二人は半七と薩庵、前説、行全と面識あり。川越屋の住いは白銀町（同一八〇頁）であり、吉田東伍『増補大日本地名辞書』坂東第六巻によれば、日本橋区の中にあり「今本銀町と云ひ、龍閑川に並行し、四丁目に至る。…寛永古図に白銀の通町を、御服町と云う」（二八七頁）と見える。

⑤朝田薩庵に与えられた書簡が現在十七通残っており、その中で薩庵は親と八度会っている事がわかる。臨師の薩庵に対する書簡の内容は非常に情が濃まやかで、人間関係に於ても理想的である。又、薩庵の宗解の深さにも驚きの念を懐き、臨師との素晴らしき信仰状態の関係を絶讃したい。互いにあらゆることに事細かく報告し、薩庵も臨師に様々な要求をし、それに対し臨師は殆んど応じている。この様な二人であることを先ず念頭に置いて貰らいたい。薩庵と両親との関係を見ると、文化十三年九月二十九日「又野生母方へ書翰御頼申上候」（全集一六八頁）が初めで、翌年九月十二日「又野拙老母にはざ〳〵御あい被下候由、何よりの本望、御礼謝しかたく奉存候」（同一七一頁）。

この様にして母に会ってくれた事のお礼が三度。手紙を届ける役、両親への伝言が二度。そして親の安否を知らせる役、臨師から両親宛の書簡もついでの時には読んでいる。両親へ書物を届ける役等である。高山半七も良く両親との交流があったが、薩庵も又、その回数の多いことが知れる。薩庵は両親以外にも臨師からの書状や連絡依頼は、かなりの数をこなしている。

薩庵の住いを知る手掛かりとして臨師から「（元政）庵主むせばにてなやみ候処、其御地池のはた仲町堺[14]やとか中やとか申薬店」（同一七六頁）で薬を求める依頼あり。由って、この近くに住んでいたかと思う。薩庵の縁戚関係者で臨師の弟子となった恵正の父親、西宮善蔵は浅草（同一八二頁）の人である。又、臨師が浅草花川戸[15]より京都に来た人に薩庵宛の手紙を託そうとしていた（同一八一頁）ことからも裏付けられる。老両親の住む青山から少し遠いので薩庵のみの訪問となっている。そこで、わざわざの言葉も頷ける。

⑥日童、母親の死を波木井孫七に報告（同二三八頁）。因に父親は文政五年に死去。

㈡　三十四人の中から三つの信仰グループが見える。

①朝田薩庵を中心とするグループの11名。

1、朝田薩庵、2、薩庵家内、3、菊地、4、鳥海、5、斉藤不言斉、6、竹かしの西村八十八、7、小笠原の西村、8、荻野八百吉、9、（神田天神下の某）、10、浅草西宮清左衛門、11、西宮善蔵。

②箔屋・川越屋を中心とするグループ6名。毎月六日に唱題行をしている（同一四八頁）。

1、箔屋、2、川越屋、3、左官弥兵衛、4、斉藤喜良兵衛、5、賀々八、6、小笠原の西村。

③高山半七を中心とするグループ6名。

1、高山半七、2、半七家内、3、叶や伊兵衛、4、七屋長二郎、5、甚蔵、6、高山周蔵。弟子分に当る人々や、つながり不明の人々を除いてその合計は二十三名になるが、小笠原の西村氏は薩庵グループと箔屋グループの両方に出ているので実数は二十二名である。

(三) 三グループのリーダ格の交流

このグループは法華信仰の仲間達である。薩庵と小笠原の西村。箔屋達と西村の関係があった様に、グループのリーダ格に当る者同志の交流が見られる。①朝田薩庵と箔屋には六回。臨師からの書状を届ける、読み合う。「法華の行者は、互に多宝塔中の儀式の如くすべしと、高祖の遺訓候へば、はくや、川越や等、惣じて異体同心の則に背き申さぬ御計ひ可然と存候」（全集一六八頁）から見てお互いにトラブル発生があるのを注意され、以後両グループは順縁にて交流あり。②薩庵と川越屋は三度あり、臨師の両親宛の著述本の行消不明を協同にて探索す（同一八〇―一頁）。③薩庵と高山半七の関係（同一七八頁）。

以上の三点について考察して見た結果、次の様なことを覚えるに至ったのである。

一、本妙臨師を巡る周辺の人々の交流は、法華信仰の絆によって生まれており、又結ばれて来たことが理解される。

二、臨師の両親も法華経信仰をしていたればこそ、各グループの信仰者達が長い間、両親と関係を保ってきているのである。

三、文化三年には江戸講中が八七〇軒も数えられている。[16] このグループも、その法華講中の内の一つではなかろうかとも思える。

四、両親を初め、身近かな法華講中の盛んな交流の中に育って来た臨師には、幼少の砌より自然にその影響を受けて深く法華経に志す基盤を見い出すことが出来るのである。

三、出家以前の学殖の問題について

臨師の勤学は信心の助道にあったが、その研究のポイントは祖書綱要第一学者鑽仰必有次第章にあった。由って、出家以前に読んだ祖書綱要（全集二五二頁）の影響は大なるものがある。

臨師周辺の人々の中にあって、宗義に深く教養のある人物と言えば先にも論じた如く朝田薩庵がいる。薩庵書簡中には、臨師から綱要に関する法門は四度あり（全集一五五、一五八、一六五、一七四頁）。その内容からして、薩庵が手元に祖書綱要刪略を置いてなければ通じない点も見える。この様な点から、臨師出家以前に於ける典籍等の多くの提供者は朝田薩庵ではなかったかと思うのである。その傍証として、書籍の調達能力が考えられる。

①本妙臨師が一妙院日導上人の弟子、智禅老尼のため、高祖注法華経を御面到乍ら調達するよう依頼している点（同一六七頁）。②臨師の弟子、教清が身延上の山から薩庵に対して「三大部不審出来次第、御集置被下候」（同二四〇頁）等の書簡が見られること。

四、むすび

一般的に於て、信仰の縁を結ぶに至る方法としては、地縁（地域・日常生活の触れ合い）、血縁、主従関係が考えられる。特に地縁の様な密着した環境から入信するのが一番多いのである。本妙臨師に於てもそうであった。両親も

信者であった法華講中の環境の中で、臨師の幼少時の法華信仰の縁は結ばれた。高山半七や朝田薩庵等の縁も大きい。薩庵は社会的な地位も高かった様である。[17] 薩庵と宗延寺日実とは三度会っていることから、[18] 臨師との縁はこの辺にあったかとも思える。

本妙臨師伝記研究に於て未だ解明されていない部分も多い。そして今日、その資料が多いとは決して言えない有様である。今はその確実なる資料に基づいて、①出家の時期と飯高入檀の年令考、②出家以前の法華信仰の環境と影響の考察に推測と解明を重ねて来たが、これから新しい資料の発見がされれば最とよくわかると思う。現段階では、ここ迄で止まっている。更に、これからも臨師伝記の研究を考察して行きたいと思う次第である。

〔註〕

（1）音馬實蔵編『本妙日臨律師全集』（以下『全集』と略す）一八五～七頁。某尊者に対して、本妙臨師は自らの心地を表白している。他にも一七六、一八九頁等に法の衰微を歎きその為に一生の生き方を決めた事が推察出来る。因に全集編纂者音馬氏の肉身（戸田師）が曾て本妙庵にて修行している奇縁がある。

（2）充洽園全集出版会編『充洽園全集』第四編三七八頁。第五編四二五―六、四九九―五〇〇頁。望月歓厚『日蓮宗学説史』八四九―七七頁。執行海秀『日蓮宗教学史』三一五―二二頁。茂田井教亨「日蓮教学体系化への動向」一七―二〇頁。（『近世法華仏教の展開』所収）等にその評価を見ることが出来る。

（3）昭和四十七年夏、友人の浜田恵王師と二人で日達猊下を訪問の際、日達師も曾て本妙庵にて七日間断食唱題修行をし、その折、臨師により大悟することを得て達師の境地、今にあることを伺う。その時、本妙庵在中の学生で給仕に当ったのは横浜の善行寺灘上恵教師である。室住先生は学生時代から聖祖と臨師の生き方に惚れて身延の人となることをお聞きし、恩師の一貫した純粋宗学を生むに至った根拠は臨師にあることを知ったのである。

（4）兵庫県西宮市の音馬實蔵氏は『本妙日臨律師全集』を刊行するに当り、その緒言（二頁）の中で稲田先生の写本を以て真書の形態に復し得た所が多いとこを述べている。室住一妙先生は昭和三十一年八月八日にその稲田師の転写本と音馬編全集と

を対校されている。それによれば、全集の書簡編に随分と字語の誤りや、一書簡が幾つものに分断されていることなどが見られる。個々の問題は後に触れたい。註の（10）参照。

（5）小野文珖「本妙日臨律師の研究」その生涯について㈠（『大崎学報』第一三二号所収）四六―六九頁。他に『与薩庵書』にみる本妙庵日臨師の信仰宗学（『仏教学論集』九号五二―六八頁）等がある。小野師は一貫して臨師の顕彰に力を注いでいる。

（6）全集二六五頁。西能勢に現存する日啓師の略本尊の銘等から考察されている。

（7）臨師の門下生は『全集』中に二十三人の名前が見られる。その他『充治園全集』第五編五一三頁に真明もいたことが知られる。最誠師は門下の中で最大の理解者であった。醒悟園の二祖で後、土佐の山内容堂公の招請にて国主の菩提寺（要法寺）の住持となる。宗門中興の日鑑師はその資である。最誠師は臨師と共に文化十一年飯高を退檀し、文政五年まで臨師に師事した様である。全集一九四頁に「初冬如レ夢謁二老師及大兄一矣、間濶有二百日矣、晤語僅三四日」とあり、この内容は十月に最誠と会うのは実に二百日振りである。ということでこの年は全体から考察して文政五年と推定できる。臨師の江戸行は飯高退檀後初めてであり、従ってこの年まで共にいたことを理解できるのである。また、文政十二年以後の八月十日付けの最誠師の書簡があり「本妙師存在に候へは、拙僧帰国もいたし不申、波木井に修行いたし罷在候へとも、遷化いたされ願望も得とけす、是耳残念無申計候」（全集二三六頁）この文から見ても、常に行動を共にした証左ともなろう。

（8）古檀林については影山堯雄編『諸檀林並親師法縁』一一、一九頁に出づ。享和四年については、藤井教正「飯高檀林の一年」四三―四頁（『大崎学報一三一号』所収）に見える。

（9）㈠の古制規は註（8）の『諸檀林並親師法縁』一七―八頁。㈡の元禄十三年制規は同じく註（8）の「飯高檀林の一年」の四四―五頁。化所数は飯高檀林所蔵文書の第六集「向城庵記憶帳」に出づ。

（10）「身延山中より長谷信徒に与ふる書」全集二〇四―五頁。臨師と長谷信徒の関係は、日啓師が玉蓮寺住寺以後、能勢に遊び療養生活（全集二六六頁）をしており、能勢からも信者が日啓師を訪問（全集二一七―八頁）している関係から出家と同時に関係があった様である。稲田写本には、同書簡の宛名に谷口左兵衛が加わっている。他に二字訂正と二字削除あり。全集と稲田転写本との対校の結果、この書簡以後、二三〇頁までには字語の訂正、削除、追加等が一八七ケ所に於いて見られる。更に書簡（頁数）の入替えが七ケ所あり、そのことにより実は綴った書簡であることが判明したものもある。又編者云くの部分が削除の一ケ所もあり。

（11）前掲『諸檀林並親師法編』一六頁。規定の講席に出席しないものは学業の進否如何に拘らず進級できない規定である。

（12）浅草福井町出身と薩庵との関係は全集一七八頁。行動を共にする事とその他の面識は同一五一頁。日芳との関係は二四八頁に出づ。

（13）師範は二人いて一方の日実師は江戸下谷車坂にある宗延寺二十八世。身延派触頭を務め、身延五十五世日逞の礼状から見ても（床司寿完編『堀之内妙法寺史料』一五五五頁）相当の勢いあり。同五十六世日晴は院代・役僧・厨司・七面山別当の義までも日実に御任せの状態である（同史料一五〇四―五頁）。宗延寺は堀之内妙法寺の触頭でもあり、日実師は十八世日観・十九世日健・二十世日現の三代に深く交わり、文化九年には同寺祖師堂建替造立執事を務め大いに力量を発揮している（同史料一〇四〇頁）。妙法寺十二世日定から二十世は飯高檀林文講・玄講の出身者である。後に飯高化主となった日晴は七歳より以後、妙法寺から大恩を蒙っており（同史料一五〇四頁）、日晴師と臨師との関係は日実のつてより始まったと考えられる。この様に政務的、寺院運営に大きく活躍している日実師は、文政五年臨師と江戸で対面し誤解を解く（全集一九四頁）までは不興をかうこと凄まじい（全集一八五―九頁）状況から考えても、日実化導は考えられない。そういう理由から日啓師化導と考えて不自然ではない。又、前説の西能勢の生活等（全集二一七頁他）から考えても日啓の弟子と言える面が多々考えられる。

（14）池之端仲町は薬街で東京都台東区編『下谷・浅草町名由来考』（三九―四〇頁）に昭和四二年の現在で、西側の一部が池端一丁目。大部分が上野二丁目という。

（15）花川戸は鈴木棠三・朝倉治彦校註『新版江戸名所図絵上巻』（七六二頁）に浅草花川戸とあり。いずれも薩庵の近くである。

（16）「巷街贅語」（『近世風俗見聞集』第四冊所収）に出づ。（冠賢一『近世日蓮宗出版史研究』一七四頁より転用）

（17）与薩庵書簡の「祖書御修学の思召、世間の名聞を御離れ被成候事随喜仕候」（全集一七七頁）社会的な地位を得ていたことが想像される。この後、出家し孝賀法師となる。

（18）薩庵と宗延寺日実の関係は全集一七一、一七五、一七六頁に見える。臨師との仲を心配し対面。宗延寺へ書状を届ける等。